

(1) アラン・コーエンによる黄金の仏陀寺の話

すべての人の本質は黄金だけれど、幼い頃にその黄金が親や社会の常識やルールなどで覆われていき、人生の中でそこに亀裂入るようなことが起こった時だけ自分の本質が見える。その本質を見たら、もうこれまでのようには生きられなくなるのです。

(2) 過去最高の神話学者であり、哲学者であった

ジョーゼフ・キャンベルは、真実がみれなくなったこの世界で、真実を見る能力があった人物です。世界中の神話を研究する中で、ひとつのパターン=アーキタイプ(原型)を発見。それが「ヒーローズ・ジャーニー=英雄の旅」です。

(3) 英雄の旅とは、人生の旅そのもの

英雄の旅とは、別離(旅立ち)、通過儀礼(試練の道)、帰還。守られた世界、日常から抜け出て冒険へと誘われます。そして、数々の困難や試練を超え、最後に最大の敵であるドラゴンと戦い、もといた場所にもどる。主人公は成長し、変容する。そして、その体験を分かち合う。これまでの自分ではない、自らの本当の力、本当の自分に目覚める。それは、人生の旅そのものです。

(4) 神話は内なる力を目覚めさせる

神話は私たちが変容し、シフトするプロセスの比喻です。神話の登場人物は私たち自身の象徴であり、探し求めていた物語の一部。神話には、私たちの本質を目覚めさせる力があるのです。

(5) 私たちは心地よい催眠状態にいる

多くの人は心地よい集団催眠の中にいて、自分の本質に目覚めていません。本当の自分を生きない理由はそこにあります。人々は環境の犠牲になっていて、社会というランニングマシンから降りられないでいます。自分の本当の能力に目覚めていないのです。

(6) 「電話が鳴るようだ」とキャンベルは言う

「冒険への誘いは、英雄が運命から呼び出されたことを意味する」まさに、電話が鳴るようだ。ジョーゼフ・キャンベルはいいいます。電話に出ると、今いるところから出て、自分の旅を始めるよう求められます。電話を無視していると、いつかハンマーのようなカタチで受け取ることになります。次のバージョンへ移行するためには、旅立たなければいけないのです。



(12) 分かち合う体験の物語こそが宝

物語とは他の人々と同じような旅に誘う招待状。ドラゴンを倒すことではなく、体験という旅の本質を持ち帰り、分かち合うこと。人生そのものが物語で、誰かの人生を変える。それが神話の登場人物たちがやっていることです。自分の内側に、次のステップを持っている。あなたがやるべき事は、次のステップに進むことなのです。

(11) ドラゴンとは、怖れ

ドラゴンとは、私たちが持っている最大の怖れです。怖れから逃げるのではなく、立ち向かい、自分の怖れを見ることができれば、怖れの終焉が確実になる。外側にあるものは内側の投影で怪物を創り出す。すべては内側にある。怖れに向き合い、成長して乗り越えることで力を得るのです。

(10) 可能性を伸ばす中に、本当のあなたがいる

誰もが深い才能を持っています。自分の才能を見つけていないから、自分には何も才能が無いと思ってしまう。気になっているのに、一度も試したことが無いことがあれば、それをやってみる。あなたが真に一歩前進し、自分の至福を信頼する時、目に見えない力があなたの信頼の一步に合わせて、すべての物事の帳尻を合わせてくれます。

(9) 偉大なる才能は、至福の中に眠っている

至福に従うことは、ハートの声を聞き、真実に従うと言うこと。ウパニシャッド哲学でも悟りへ至るポイントは、存在・意識・至福と表されている。自分の深い衝動を信頼して、喜びを感じることをする。至福の追求こそが本来の自分へと誘うのです。

(8) 自分だけの道を歩くこと

これまでの自分を超えて、真実の自分を探求したい。そんな内なる衝動から自分探しが始まる。森とは、自分の暗闇や未知のものを表していて、その森を探求することが自分を進化、成長させる。そこに大きな試練があるかも知れないが、待っている報酬も大きい。それが通過儀礼です。

(7) 古いものが無くなり、新しいものが残る

役割を終えたら、それはもう使えないと認識すること=手放すこと。古いカタチが死ぬと、不死鳥が舞い上がるように、本質的な意味を持つ新しいカタチに取って代わる。芋虫がさなぎから蝶に変わるように、全く新しい次元に羽ばたいていく。人生をよりよく、大きなものにします。